

言葉の通じないものと対話する方法～小径が開く時～

登壇者：鴻池朋子（アーティスト）

ドミニク・チェン（研究者）

日時：2020年11月17日（火）19:00～20:30

会場：オンライン開催（Zoom）

■「言葉」の持つ、根源的な暴力性

司会：新型コロナによって、私たちを取り巻く世界は大きく変わってしまったように思われます。ですが、今こそ、異なる価値観や存在とコミュニケーションをとる「小径」をつくるチャンスなのではないでしょうか。本日のシンポジウムでは、アートと情報という異なる分野で、それぞれ言葉の通じない相手とのコミュニケーションに取り組んできた鴻池朋子さんとドミニク・チェンさんに「言葉とは何か」「コミュニケーションとは何か」という本質に迫るお話をしていただければと思います。早速ですが、マイクをおふたりにお渡しいたします。では、どうぞよろしくお願いいたします。

ドミニク：事前の打ち合わせですね、とりあえず僕が最近研究している微生物と会話ができるシステムについてお伝えしたら、鴻池さんから「学者っぽいね」と言われて（笑）

鴻池：ああ！ すいません（笑）

ドミニク：「しまった！」と思ったんですよね。鴻池さんにそういう借り物の言葉をまくしたててしまって、すごく反省したんです。なので、今日はなるべく借り物の言葉を使わないで話してみようとなりました。借り物の言葉というのは、例えば、エコロジーとかサステイナブルとか……カタカナ英語ですね。

鴻池：ダイバーシティ、ジェンダーフリーとか。ファシリテーション、コミュニケーションも。

ドミニク：そういうのをなるべく使わないルールにしよう。その打ち合わせの日がね、ちょうど、アメリカ大統領選のバイデンとトランプの討論会の日だったんですよ。打ち合わせが終わってから、YouTubeで討論会をみていたんですが、ルールのある対話とは一体何かと……

鴻池：ルールがまるでない討論会だった……

ドミニク：そう。まるでルールのない討論会を横目でみつつ、鴻池さんとなんていうか、裸の言葉を交わしたいねって打ち合わせできたこと自体がすごく嬉しくなって。トークイベントってどうしても、最大公約数のお客さんに届く、最大公約数的な言葉というものを無意識のうちに選んで話してしまうので。でも討論会をみていて、ある種、それも隘路に突き当たってるんじゃないかっていうことを感じたんです。分かり合えない、言葉が通じない。

鴻池：討論会でいうとね、道具としての言葉の使い方がむき出しになってる感じもしたんです。ガーっと言って驚かすとか、ビクッとさせるとか。

ドミニク：威嚇、攻撃。

鴻池：そう。対話するふうを装っていながら、音で相手をかく乱させるやり方をみると、言葉を武器として使っているのかなと思いましたね。なかなかそういう使い方はしない、夫婦げんか以外では（笑）。

ドミニク：面白いですね。元々言葉というものが持っている暴力的な力が、そこに出ていたんじゃないかと。でもそれってね、身近なコミュニケーション……あ、コミュニケーションって言っちゃいけないんだった……

鴻池：マイナス1！

ドミニク：身近な人と話すとき？

鴻池：あははははは！

ドミニク：例えば自分の子供と話するとき、別に攻撃してるわけじゃないけれども、相手を自分の意のままにしようとしているという側面が否めないんじゃないかとは思ったりもするんです。一番わかりやすいのは、子供が危ないこと、いけないことをしようとしたときの「叱る」言葉。親としては反射神経みたいに出てしまうんですが、子供を制御しようとしてますよね。でも例えば、子供に自分がいいなと思う話をするときも、うがった見方をすれば、自分が良いと思うものを押しつけようとしている。そういう根源的な暴力性がある。とくに耳から入る言葉は、無意識に影響を及ぼしやすい、良くも悪くも。

鴻池：全部うがった見方をしたら、学校なんて、なんて暴力的な……

ドミニク：そう。なので、僕は非常に暴力的な職業をしています。300人の学生に向かって1人で話すというのは、下手をしたら、洗脳にもなりかねない危うさをはらんでいるなって思いますね。

鴻池：そうならないようにって、ビクビクする？

ドミニク：ビクビクはしないんですけど、怒りみたいなものをどうやって抑制するかっていうのはありますね。社会の不条理とかに怒りを覚えることがあったとして、でもその怒りを一方的に学生に伝えるというのは、「お前らも怒れよ！」っていうメタメッセージが乗っかってしまうから。あ、メタメッセージ……

鴻池：あはははは。またマイナス！

■絵をみること、文字を読むこと

鴻池：メタメッセージってことでいうと、そういうものを感じるようになった経験があって。3.11の震災のときに、何か自分の体に眠っていたいろんな感覚がさらされていくような感じがあったんですね。それは私だけじゃなくて、多分多くの人が。

ドミニク：そうですね。

鴻池：何か不思議な距離感があるというか。それまで普通に描いていた絵が、パネルの上に描いてある絵とかがもう、「なんだこりゃ」っていう感じのつまらないものにみえてきて。それは絵の中身がどうこうっていうよりも、すごく文字が書かれてるような感じがあったんですね。

ドミニク：へえ、おもしろい。絵なのに！

鴻池：絵なのに。ギャラリーのパネルに絵をかけた時点で、その画角の中に入り込むことを暗黙のうちに了解して、みんな絵をみているんですよね。でも私はもともと、絵がかけられている壁がどうなっているかとか、会場の入り口はどこにあるのかとか、来場者が今日何をしたあとでここに来たのかとかをずっとイメージしながら、その途中にたまたま絵があるっていう、作品があるっていうような感じの人だったってことが、改めて明快にみえてきたというか。それで文字を読むような感じ、黒板に書かれた文字を読むようにみえてきて、絵が。絵も文字も同じだな、似てるなって思ってきたんですね。

ドミニク：でもそれは、あまり、おもしろいっていう感情じゃないですよ。

鴻池：息苦しい。

ドミニク：なんか決められたルールの中にとどまっている、つまらなさみたいなことですかね。

鴻池：形の後ろに、何か意味があるみたいな感じというか。例えば、デザインされたポスターなんかはわかりやすいんですけど。記号化されたものの背後にある意味ってものを读みますよね。読むっていうのは、ただ言葉に出して読むっていうのじゃなくて、意味をつなげていくというか、それと似ている感じがしてしまっ。もう絵画であろうがなんであろうが、すべて文字のようにみえてきた。

ドミニク：それは、等価交換できる記号の羅列みたいにみえたってこと？

鴻池：そうそう。

ドミニク：すごいですね。でもでも、お言葉ですが、もともと鴻池さんってそういうところありますよね。美術の枠組みとか型に飽きたというか、飽きっぽいですよね（笑）。いや、この話は、実は伏線があって……

鴻池：ドミニクさんも飽きっぽいでしょう？

ドミニク：え？ 僕？ はい（笑）

鴻池：何かそういう感じがしました（笑）

■作家と顧客の新しい関係性を提示した『A ランチ』

ドミニク：伏線というのは、2005年に鴻池さんにロングインタビュー（※）をしたことがあって。そのインタビューで、鴻池さんの『A ランチ』（※）っていうプロジェクトについて聞いているんですけど。それが、すごくおも

しろくて。鴻池さんがキュレーターとして、何組くらいの現代美術作家さんに声掛けをされた？

※インタビュー <https://commonsphere.jp/2012/08/10/kounoike/>

※『A ランチ』(2005 年 AXIS ギャラリー)

鴻池：30 組ぐらい。ファミレスみたいなメニューをつくって。

ドミニク：ファミレスでしたか？ ちゃんとしたレストランでしたよ。

鴻池：あ、メニューがね。

ドミニク：なるほど。本当にレストランみたいな展覧会場だったんですよ。お客さんもテーブルに着席して、作品メニューが配られて、その中から作品を選んで注文すると、ウェイター役の人が作品を持ってきてくれる。でもこれってある意味、ギャラリーとか美術館の空間というものに対する、批評的なプロジェクトだったと思っていて。実際に僕も体験したんですけど、テーブルで作品をじっくり体験できるっていうのは、もう素朴な嬉しさだったというか。この近い距離感を体験してしまうと、どうして絵や彫刻は触っちゃいけないのかと思ってしまう。もちろん、1 万人が触ったら劣化しちゃうとかは当然わかるんだけど、それでも、遠くから眺めるだけっていうのは、不自由な表現との向き合い方なんじゃないかと感じて。鴻池さん自身、そういうことをずっと考えてきてやってきたのではないかってことを、2005 年のインタビューでお伝えしたんですね。そうしたら鴻池さん、「私は面倒くさがりなんですよ」って答えたんです（笑）

鴻池：ええ！ もうその時は素直に言ってたんですね（笑）。今は取り繕ってますけど。

ドミニク：いやいや、取り繕ってないです（笑）。先ほど 3.11 の後に、絵も記号にみえたっていうふうにおっしゃったんですけど、2005 年の時点で、すでにアートの制度やルールとは違う、オルタナティブなものを考えようとしてたっていうことは、やっぱりその伏線だと思うんですよね。

鴻池：鋭い指摘で、私はほとんどやったことは忘れてたり、ついうっかりやっちゃったっていうようなことが多かったりするんですよね。たまたま、そういうスペースが空いてだけとか。でも人生ってそういうもんじゃないでしょうか。

ドミニク：そうですね（笑）

鴻池：『A ランチ』のことでいうと、やっぱり作品を選ぶという行為にすごく興味がありました。作品を選ぶ人と作品とは、あくまでも 1 対 1 の関係性。名画とか誰その代表作とか、そういう情報で作品をみに行くのではない関係性ですね。

■アート作品とのコミュニケーションが変わってきた

鴻池：展覧会という型に対しても、目標とする完成形に向かうのが普通の展覧会だとしたら、私の場合はそこにあるもので何とかしようとするのが好きなんです。そこにあるもので、やりたいことをやりたいって思う。今でいうと、リサイクルでしょうか。

ドミニク：リサイクル！ おもしろいですね。先日、『ちゅうがえり』（※）をみに行って、なんか、わんぱく小僧が暴れ回ってるなっていう感じを受けたんです（笑）。人のこと、わんぱく小僧って言っちゃってますけど（笑）
※『鴻池朋子 ちゅうがえり』（2020 年アーティゾン美術館）

鴻池：言葉は暴力です（笑）

ドミニク：はい、暴力です（笑）。というのは冗談ですけど、鴻池さんの念がほとぼしった展覧会でした。

鴻池：多分なんか、展覧会っていうフォーマットとか型のなかで完成度を高めるとか、目的を持った仕組みに飽きていて。途中で終わっているものがあったり、雪のなかで下手くそな歌を歌っている映像だったりとかも出しちゃう。作品のすばらしさで魅せると、見た人も「緻密に描けていますね」って最初は言うんですけど、でもそれぞれの人に最後に到達するものは違うんだろなっていうふうに思っ

ドミニク：「緻密に描けていますね」とか言うんですか？ 本当に？（笑）

鴻池：以前は。もちろん、技術的なことに驚くってことは、アートにとってはすごく大きな要素だったと思います。他の人にはつくれない、テクニク。でも、何かちょっと、観客が変わってきた感じがするんです。受け取り方が変わってきた。

ドミニク：受け取り方が？

鴻池：目でみるってことだけじゃ物足りなくなってきた。だって、いろんなサービスがあふれてて、Netflixとかシリーズ物も全部みるんだけど、ただやりきった感だけが残るみたいになった経験あるでしょ。

ドミニク：うんうん。

鴻池：アート作品も次代に残しておかないといけないというか、大事なものとして誰にも触れさせなくして保存しないといけないというものだったじゃないですか。でも、それも変わってきた。しかも、私は残したくないんです。例えば、森の中で何かしたんだけど、また元に戻して帰ってくるようなことの方がおもしろい。

ドミニク：『美術館ロッジ』（※）とか……？

※2012 年 北秋田市・森吉山避難小屋に作品を展示するプロジェクト

鴻池：そう。でも、なんとか痕跡も残そうとするわけですよね。自分の作品がここにあったみたいな痕跡を。

ドミニク：それはアーティストとしての本能？

鴻池：そう。痕跡を残したくないし、残したい。やっтерることがちぐはぐしてくる状況に自分を落としこんでるわけなので、展示終わったらすごくホッとする。

ドミニク：『美術館ロッジ』のときは、芸大の学生さんたちを連れて行って、みんなでいっぱい指人形を付け足して。だんだん自分の作品じゃなくなっていく感覚が気持ちいいというようなことを本に書かれていましたけど。

鴻池：その通りですね。責任逃れ（笑）。ドミニクさんのクリエイティブ・コモンズにも繋がる話なんですけど、作品ってまるで自分から生まれてきた子供のようなわけです。作品のことはずっと、親である作家の許可を得ないと使えない。でも、そもそも今、使っている言葉でさえも全部借り物で。

ドミニク：言葉そのものがね、先人たちがつくってきたものだから。

鴻池：だから何て言うんでしょうね、アートであれアニメーションであれ、映像であれパフォーマンスであれ、何か言葉のような質感を持っていく。それで、やり方を変えていこうかなと思ったんです。

ドミニク：アートの制度が嫌だと、かといってそこから飛び出すわけでもなく、美術の中心から。中心ってどうだって話ですけど（笑）

鴻池：中心がないのが流行ってますから（笑）

ドミニク：流行っぽいこと言っちゃった（笑）。でも、美術のモヤモヤする現場に居続けながら、ちょっとずつ奇襲をかけていくというか、新しいことをやり続けてるっていう。その鴻池さんとアートの緊張関係がやっぱりすごくおもしろいと思うんですよね。矛盾を抱えてる感じがすごくエネルギーっぽいっていうか、そのポテンシャルが鴻池さんの体内に渦巻いていて、それがこう作品だったりパフォーマンスだったりっていうものになっていくっていうか。僕も美術館でキャリアを始めたということもあって、現場の感じはよくわかるんです。僕はどちらかというと、記号の世界からどうやって情感とか感情をつくり出せるかっていう方向ですが。

鴻池：ICC（NTT InterCommunication Center）で研究員、キュレーターだったけ？

ドミニク：はい。キュレーションはお手伝い程度だったんですけど。僕が最初にやったのは、映像アーカイブをつくる仕事で。ICCにあった膨大な活動フィルムをインターネットで公開するという仕事を任されて入社したんだけど、その時になんていうか、この映像自体は資源になるべきじゃないかと思って。映像アーカイブ HIVE として、全部にクリエイティブ・コモンズ・ライセンスをつけて、非営利目的であれば、自由に編集して使ってもらえるようにしたんです。ただ 2002、3 年当時は、どの美術館もまだやっていないことだったので、理解を得るのがすごく難しかったんです。

鴻池：ICC の内部でね。

ドミニク：内部で。今年はそれこそコロナで、アメリカのメトロポリタン美術館を筆頭に、何万点と公開していますけど。それも本当に、今年のこと。

■アートは連鎖していくリサイクルの種

ドミニク：さっき鴻池さんが、リサイクルって言葉を使っていましたけど、あれもよくわかるんです。作品はみんなにペタペタ触られて朽ちていっても、そっちの方がより多くの人の記憶に深く残るかもしれない。芸術作品を触った人が、芸術家になるってわけでもなくても、何か新しい会社だったり、何か音楽をつくったりするっていうこともあるかもしれない。アートは、そういう連鎖していくリサイクルの糧なんじゃないかっていう気がして。

鴻池：うん。触るってことに関していうと、目でみるのとはやっぱり違って。今いる部屋もね、隅々までみえて、すべてを把握した感覚になるんですけど、触るとなると、今いる体の周りに限られるじゃないですか。しかもね、立派な作品でも触ると意外とザラザラするとか、何か感触があることによって、イリュージョンが1回そこで断ち切られる。意外と硬いとか、例えばですね。

ドミニク：権威が剥げ落ちる感じ。

鴻池：そうですね。すごい素晴らしくみえていたものが、触ることによって、パネルの上の紙だになってあっさり思ってしまったりする。

ドミニク：おもしろいです。

鴻池：でもね、作家ってそういうものをつくっているというか、なんか人をだますような仕組み、イリュージョンの仕掛け、エンターテインメントの仕掛けをつくっていて。

ドミニク：『ちゅうがえり』の影絵灯籠も、なんかそういう考えも関係してるんですか？

鴻池：そうですね。あれは現代アーティストのクリスチャン・ボルタンスキーとかをみていて、「影絵はいいなあ、影絵は！」って思ってた。

ドミニク：どうということ？

鴻池：影絵だったら、だれでもできるでしょ。例えば、手でキツネの形をつくれば、もうできる。単純で不思議で、アウトラインの形が出て、すごくいい、楽しいって思ってた。ただ、ボルタンスキーは“死”の方向からつくるんだけど、私なら全く逆の方向性で作れるのになってずっと思っていたんです。全然違う方向からやれるのに、「なぜやらないんだ、ボルタンスキー！」って。

ドミニク：あははは！

鴻池：でもまあ、それはボルタンスキーの人生があるから。表面的には平和な、戦争もない日本で生きている私が、ものすごく深い悲しみを持っている彼に、共感なんてもちろんできないけれども、でもその影絵が持っている良さは、別の方向からもちゃんと表現できるよって。それをちゃんと出すことが、自分にとってのリサイクルだったんだと、今、そう思いました。

ドミニク：おもしろい。そんな思いがあったんですね。車輪でつくられた影絵灯籠が回りながら、生命の種がどんどん変わっていくようなインスタレーションでしたよね。

鴻池：そういうことを目指したんだけど、らしくないなと思って途中で飽きて止めた（笑）。ちゃんと頭で考える、生命がこう繋がってきたって幻想も1回切っちゃえと。車輪の形が回っていると、つい何か繋がってるように感じてしまうのも切ろうと。

ドミニク：で、切ったんですか？

鴻池：そう。飽きたから。

ドミニク：やっぱり（笑）

鴻池：別にね、人に対して教えなくていいわけじゃないですか。猿から人にこうやってなってきたんだと思わせておいて、虫が登場しちゃう。そのユーモアというか、破綻については、もう観客が繋げていくしかない。こんな話、今日、ドミニクさんに聞かれないと出てこなかった。

ドミニク：型に収めたくないっていう気持ちがあるんでしょうね。一番新しい本の冒頭だと思うんですけど、うろ覚えで申し訳ないんですが、どんどんいろんな生き物になっていくストーリーもありましたよね。

鴻池：雪が解けて水になって、土に染みこんだらミミズになって、ミミズが今度は種になって、芽を出して……

ドミニク：それです。ミミズから種とか、鮭が熊になるとか、結構そういう驚きの飛躍があって。生物学的ななんとか目っていうような大元が、いきなりジャンプしていくっていう感じがすごく楽しくて。そこは科学でも、宗教でもない、鴻池さん自身の借り物じゃない想像力で文章が書かれていて。

■クリエイティブ・コモンズのプロジェクト『物語るテーブルランナー』

ドミニク：それからあの『物語るテーブルランナー』（※）もすごくおもしろかったです。なんというか、とてもクリエイティブ・コモンズの的なと思ったんですよね。

※2014年～ 秋田・青森・石川・タスマニア・フィンランド等で継続的に行われているプロジェクト

鴻池：今ちょっと、作品についてインタビューされている感じになっているので、言っておきたいことがあって。私の場合、つくってしまった、できてしまったというのが作品で、その作品に出合った観客の言葉が唯一の作品の言語化で、それ以外には言語化ができないと思っているんです。だから今、ドミニクさんに質問されているんですけど、どう感じるかはもうドミニクさんのものというか。だからみなさんも、そこが面白いところだと思って聞いてもらいたいです。私はもう作品とは切り離されていて、絶縁した作品と観客は出合って、その言語化を今しています。

ドミニク：ありがとうございます。あの『物語るテーブルランナー』は秋田から？

鴻池：最初は秋田で、それから、世界中のいろいろな場所でちょこちょこっとやるような感じ。

ドミニク：いろんな土地の人のパーソナルな話を聴いて、鴻池さんが一度絵にして、語った人たち自身でその絵をテーブルランナーとして縫ったり織ったりしてつくっていくプロジェクトで。集団制作的だし、かつ鴻池さんはキュレーターで、インタビュアーで、絵描きでもあるしっていう関係性がすごくおもしろかったんです。

鴻池：言われてみると本当に、クリエイティブ・コモンズの的な要素がたくさんありますね。

ドミニク：自分のものっていう境界線がすごく曖昧ですし、美術の制度では“鴻池朋子のプロジェクト”になるんだけれども。実物のテーブルランナーをみると、鴻池朋子という存在は背景に溶け込んでいて、でも溶け込んでいる鴻池さんが気持ちよさそうにも感じられて。作家であることの呪縛から逃れるような体験を、鴻池さんは楽しんだんじゃないかなって思ったんです。

鴻池：作家であることの呪縛から逃れるっていうより、なんでみんなアーティストになりたがるんだろうなあっていう不思議さかな。何かものをつくっていたら、それはもう同じものづくり。その人にとっての大事なことや大切なものっていうのは、美術館の枠にははまらないから。アーティストっていう型に持っていこうとする感覚のほうが奇妙な感じがしてるんですよ。

■質疑応答（一部抜粋）

酒井：ここからは、Zoom のチャットにきている質問にお答えいただきたいと思います。ドミニクさんに質問です。「この1、2年で、日本語が第二外語の人と日本語で話すことが普通になりました。また、私の日本語がいつべんに複数の言語に、または日本語→ロシア語→英語という順に通訳されることもあります。通訳されても意味が通じるよう、特に微妙な感情面を削ぎ落としたシンプルな日本語にしないと、と不自由に思います。日本語を母国語としない人に、言葉で微妙な感情を正確に伝えようとする場合、伝えたい感情の何%くらいこぼれ落ちたり、ズレが出たりする感じがありますでしょうか」

ドミニク：何%くらい…80%くらい伝わってないんじゃないですかね。アメリカの大学に入ったときにすごい痛感したのが、文法もしくは発音的に間違っただけで通じないのに全然通じない。それはイントネーションとか、表情とか、そういうものもワンセットで英語なんだってことを本当に痛感した。だから僕は、英語を話すときのテンションが、日本語より高めになります。自分が使える言葉ごとに自分のバージョンがちょっと違うんだと考えるようになってからは、言葉との向き合い方が楽になりました。

酒井：では、鴻池さんに。「鴻池さんの作品の在り方は、自然、生き物、テーブルランナーのような市井の人々の声を降ろす、ある種のシャーマンのように感じています」というご感想ですが、いかがでしょうか。

鴻池：ちょっと今、シャーマンからお面を思い出したんです。能のお面。前に、お面をみにいく機会があったんですけど、そのときも文字みたいにみえてきちゃったんですよ。何だろう、その後ろに人がいるんだっていうことを考えたら、意味がある文字みたいにみえて。しかも、そこにいた能楽師の人が「お面には本当の自分が現れる」みたいなことを話したんですよ。お面の背後に人がいて、背後にあるものが本物で、しかもそれが正面側に現れてくるっていう。そのときに私は、お面がなくてもトランス状態というか覚醒できるほうがいいなって、なんでか知らないけど思っちゃった。つまり、お面をかぶって、その背後に何か意味を持たせたりするってことは、すごく言語的な表現だから。そうじゃなくて、色気はなくてもこのまんまを出せるような方法があるはずだよなって。シャーマン的とか呪術的とか、それって言語に近いような感じがちょっとしました。

ドミニク：初めてそういう意見を聞きました。憑依体験とか呪術って、言葉の対極にあるっていうふうに思われがちなんじゃないかなって思ったから。

鴻池：ええ？！

ドミニク：だからすごく面白くて、そうですね。言語ってというか、記号ってことですよね、目にみえる。

鴻池：そうそう。

ドミニク：社会的な意味を帯びている記号、記号化されてるってことだと思うんですけどね。

鴻池：だって顔があるのにお面をつけるってことは、背後にいろっていうことを表現したいのが、丸見えじゃんって思っちゃうんですよ。私は表面にあるものだけを信じてみたい。背後なんかみない。それぐらいみるっていうことは、すごく欠落したものを持ってる感覚だって思ってる。

ドミニク：表面だけにするのが本来の見立てですから、それでいいんだと思いますね。

鴻池：ああ、そうか。

酒井：最後に、私からの質問です。言葉の通じないものとのコミュニケーション……あ、やりとりですね（笑）。やりとりをするための「小径」をテーマとしていましたが、お二人はどのような小径をつくっていったらよいと思われるのでしょうか。

ドミニク：なんだろうな。小径って多分、一時的な獣道だと思うんですよね。放っておくと、いつの間にか草が生い茂って、なくなってしまうような。コミュニケーションも一緒だと思っていて、放っておけば、経路がなくなっちゃうってというか。対話っていうものは、やっぱりその都度その都度、小径を通して踏みしめて、「今、ここが通じているよ」っていうことを確認して話すってことだから。ちゃんと忘れ去られるとか、ちゃんと朽ちていけるっていうことがないと、小径が開くっていうことの喜びとか面白さっていうことはなくなってってしまう。だから、なくなっていくってことを悲観的にみるんじゃなくて、ちゃんとなくなる、ちゃんと失われる、ちゃんと忘れられていくっていうっていう目線にいるのがいいと思う。言葉が通じない相手というのは、作品、人間以外の生き物でも、人間同士でもいいんだけど、その間につくる小径は一時的なものだってことですね。

酒井：ありがとうございます。鴻池さんどうでしょう。

鴻池：本当に、本当にその通りだなと思って。展覧会とか教室、家もそうですが、安定したい世界って閉じがちなんですけど。でも、その抜け道をつくっておく。

ドミニク：抜け道って表現いいですね。

鴻池：全然違う分野の人とでも、ちゃんと開く道を持っているのがいいなと思いますね。バイバイって別れたらまた何年もその人のことを忘れながら、お互いの仕事や生活に没頭しているんだけど、また会ったらすっと繋がるような道を持っている感じですかね。

酒井：ありがとうございます。そろそろお時間が来てしまいました。まさに暴力的ではない、心地よい時間でした。みなさまそれぞれのご自宅から、鴻池朋子さん、ドミニク・チェンさんに拍手をお願いします。